

第3章 松江市の歴史文化の特徴

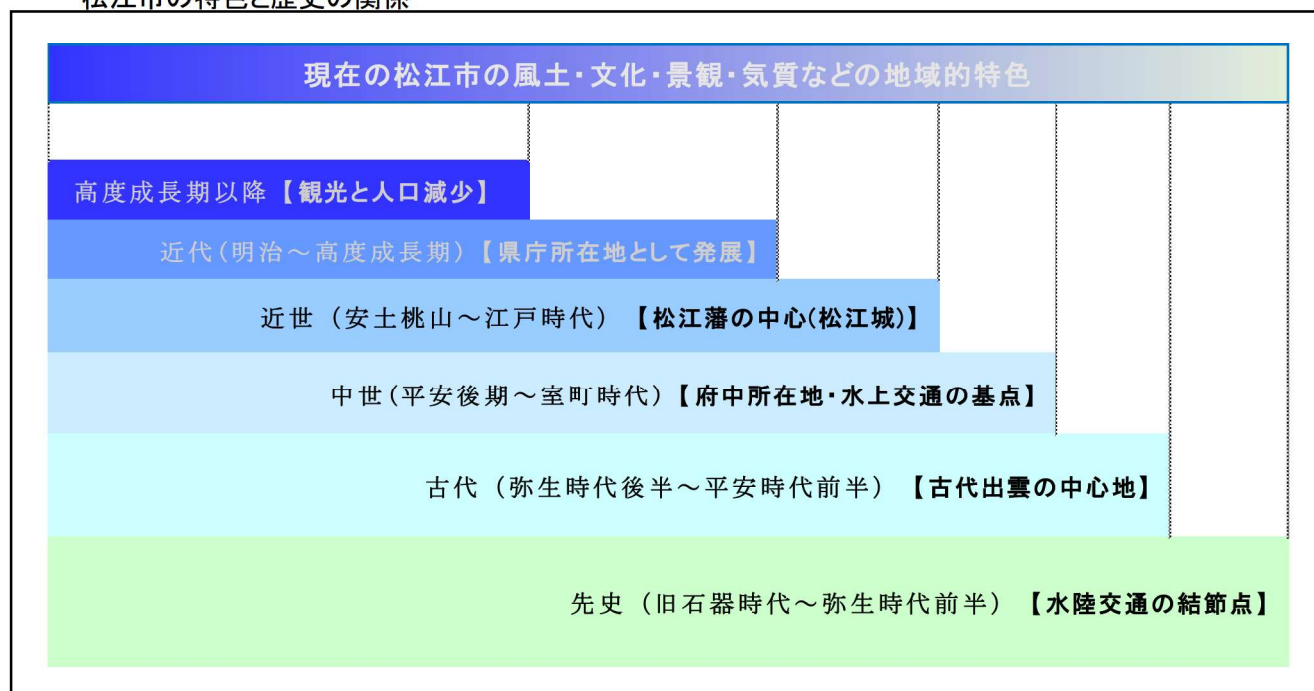
松江市は歴史と文化に恵まれたまちです。松江に住む私たちは、自分たちでこの環境を作り出したのではありません。松江は長い歴史の積み重ねと、空間の広がり相まって、独自の歴史文化を育んできました。

松江市の歴史は、前章で述べたように、約3万8千年前にホモサピエンスが活動し始めた頃から、遊動活動の交差点でした。縄文時代には低地部に海水が浸入し、松江周辺は外海と内海に面して、豊富な水産物に恵まれ、山の幸とともに居住環境に恵まれた人口が多い地域となります。弥生時代には西に湾を開く古浦から、文明の先進地である北部九州や大陸の文化が到来し、内海の南北に拠点的な集落が発達します。古墳時代になると、中海と宍道湖を結ぶ大橋川の水道（朝酌渡）を利用して内海交易を支配することで、松江市南郊が出雲の中心地となり、奈良時代から平安時代には出雲国の国府が置かれます。

平安時代後期からの中世にも、国府は府中として政治や経済の中心をにない続け、やがて宍道湖の東に形成された砂州の上に末次、白瀉の湊町ができて近世の基盤が形成されます。戦国時代には安来市広瀬町富田城に本拠を置く尼子氏と毛利氏との主戦場となり、松江市域には各地に城が築かれます。江戸開府後には、堀尾氏が出雲国に封ぜられて松江市末次北側の亀田山に築城し、現在に続く城下町が形成されます。やがて京極氏を経て松平氏が国主となり、松江城下町は周辺の農村、山村、漁村とさまざまな食品、生活必需品や産物などを介在して経済圏を作り上げていきます。その形は、新しい明治の時代となっても基本的に大きな変化はないままに、松江藩が島根県となり、県庁が松江城三之丸に建てられたのです。

小泉八雲が驚いたように、松江は長い歴史的な風土と景観を残していました。そして現在も、変化してはいるものの、長い歴史の積み重ねが残されていることが松江の文化を奥深いものとしているのです。

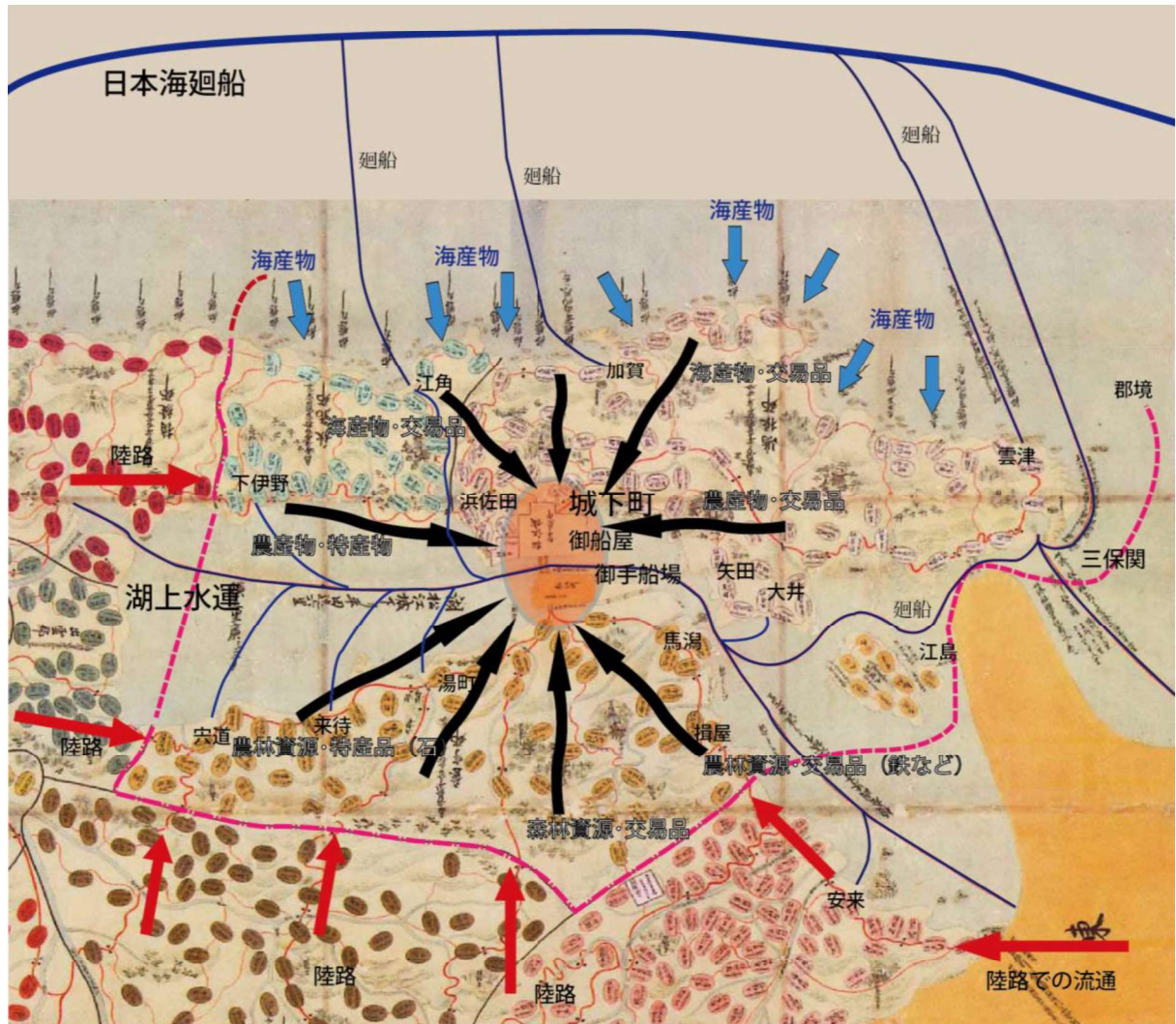
松江市の特色と歴史の関係



松江市の地域的特色は、長い歴史の積み重ねの上に成り立っています。約3万8千年前にホモサピエンスが日本列島に到来し、松江周辺で生活して以来の分厚い基盤が松江を作っています。しかも、各時代を通じて地域の中核であり、各時代や様々な文化財が残されています。

一方、平成の大合併を経て松江市は大きくなりました。しかし、歴史を振り返れば、現在の松江市は宍道湖・中海の南北沿岸地域である意宇郡、島根郡、秋鹿郡の区域で、古代までさかのぼっても同じ政治的領域の中にありました。それぞれの時代で、中心的な核の地域を持ちながら、周辺地域と「持ちつ持たれつ」の関係性の中で政治、経済、文化圏を形作っていたのです。

このように、時間と空間の重なりと絡み合いが、松江の歴史文化の深みと多様性を生み出したといえるでしょう。



江戸時代の松江城下町と周辺地域の関係【模式図】

松江城下町は、都市として、日本海沿岸の浦浦から交易品や海産物、農村から農産物やその加工品、木材や森林の産物の加工品やハゼなどの特産品、宍道湖・中海沿岸地域から内水面漁業の産物や交易品などのやりとりをして成り立っていました。

(本図は「宝永7年出雲国絵図」島根大学附属博物館蔵を下図としている。)

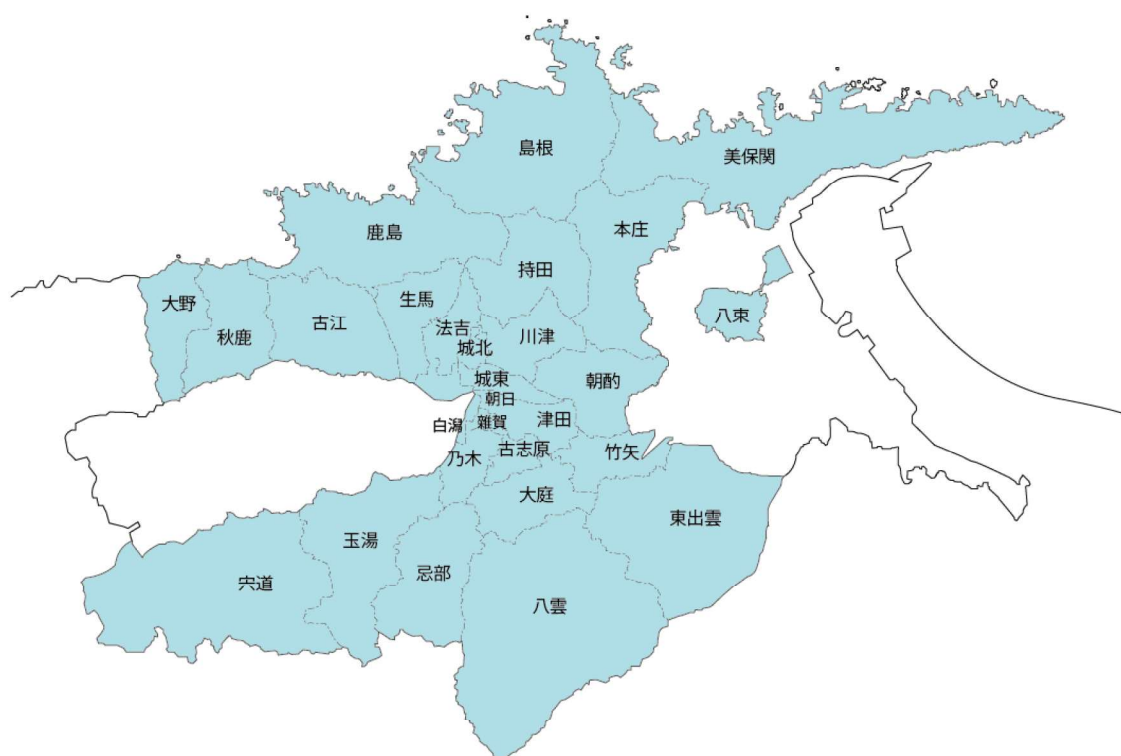
1. 4つの地域と12のゾーン(小地域)

松江市は北から日本海側、宍道湖・中海大橋川沿岸、中国山地北麓部、という地勢や風土の異なる地域が連なっています。それぞれの地域は、生業や習俗が地勢に合わせて営まれてきたため、異なる歴史的風土を形作ってきました。そのうえで、地勢ごとに小地域が生まれたり、地域ごとの交流・交易が進んで生活文化が混交したりしながら、独自の地域色を生み出しました。

調査研究体制を強化しながら、以下の4つの地域と12のゾーンごとに調査研究を進めていきます。そしてゾーンの特徴を明らかにするとともに、ゾーンをこえた活用のためのストーリーを組み立てていきます。

4つの地域・12のゾーンと現在の公民館区

地域	ゾーン	公民館区		
1) 日本海沿岸地域	①日本海沿岸東部	美保関公民館	島根公民館	(鹿島公民館)
	②日本海沿岸西部	鹿島公民館	(島根公民館)	秋鹿公民館
		大野公民館		
2) 中海・宍道湖沿岸地域(北岸)	③中海北岸・東岸	(美保関公民館)	本庄公民館	
		朝酌公民館	川津公民館	
	④旧城下町北	城東公民館	城北公民館	城西公民館
	⑤松江市街地北縁	法吉公民館	生馬公民館	持田公民館
		(川津公民館)		
3) 中海・宍道湖沿岸地域(南岸)	⑥宍道湖北	古江公民館	(秋鹿公民館)	(大野公民館)
	⑦宍道湖南岸	乃木公民館	玉湯公民館	宍道公民館
	⑧旧城下町南	白濁公民館	雑賀公民館	朝日公民館
	⑨松江市街地南郊	古志原公民館	大庭公民館	
	⑩中海南岸	東出雲公民館	竹矢公民館	津田公民館
	⑪大根島・江島	八束公民館		
4) 中国山地北麓地域	⑫中国山地北麓	忌部公民館	八雲公民館	(玉湯公民館)
		(宍道公民館)		





松江市の4つの地域（概念図）



松江市の12のゾーン（概念図）（国土地理院地図使用）

1) 日本海沿岸地域

①日本海沿岸東部ゾーン

日本海に面した島根半島北側、特にその東半は全体的に沈降傾向にあるため、複雑に入り組んだリアス式海岸が広がっています。海岸の岩礁は波に洗われて洞穴や海食崖^{かいしよくがい}を形づくり、川が流れ込む湾の一部には美しい砂浜も見られます。国の名勝・天然記念物の潜戸^{くげど}、名勝の美保の北浦がその代表で、広い範囲が大山隠岐国立公園となっています。

小河川が流入する湾には小規模な平地が見られ、それぞれに漁村が営まれています。これらの集落の多くは『出雲国風土記』に「浜」、「浦」として記載されており、古代から海を生業の中心とする集落が続いていることを示しています。それは浜、浦ごとに散在する古墳の分布からも読み取ることができます。また集落ごとに、独特の習俗や伝統・信仰の姿を残していることも大きな特徴です。

このゾーンは東側に突出した埼となり、「国引き詞章」で引かれた地の境目となる宇波折絶^{うわのおりたえ}と想定される美保関町稲積^{いなづみ}付近で東西に細分することもでき、図ではその西側を日本海沿岸地域東部（中央）ゾーンと記しています。

②日本海沿岸西部ゾーン

現在の鹿島町恵曇、古浦地区は日本海沿岸地域の中で最も広い湾で、先史時代より松江の海側の入り口の役割を果たしてきました。近代以降は出雲地区最大の漁港として栄えてきた歴史を持ちます。一方でその西側は、北山山系の分水嶺が北側に偏っていることもあり、比較的凹凸の少なく海食崖が目立つ地形となっています。『出雲国風土記』にも恵曇浜^{えともし}から楯縫郡^{たてぬい}の自毛埼^{しも}（出雲市坂浦町の牛の首）までは岸壁が切り立って険しい、と記載されるように外海に直接面する厳しい断崖地形が続きます。こうした地形の中でも、緩斜面を選んで魚瀬^{おのぜ}地区や秋鹿町芦尾地区で半農半漁の集落が営まれてきました。秋鹿地区の谷奥の集落は、こうした海岸べりの集落とのかかわりが深い面もあります。

おおむね旧秋鹿郡の日本海側に相当し、「歴まち計画」での「鹿島エリア」を含みます。

2) 中海・宍道湖沿岸地域（北岸）

日本海沿岸には多くの潟湖（ラグーン）が見られますが、中海・宍道湖は現在残る最大級の潟湖です。縄文時代は北山山系と中国山地側の陸地に挟まれた、水道状の海でしたが、西は斐伊川や神戸川、東は鳥取県の日野川が流してきた土砂によってせき止められ、湖となったものです。東側は砂州として発達した弓ヶ浜半島で仕切られていますが、北は境水道で海とつながっており、日本海からつながる穏やかな内水面として、古代から戦後まで水上交通のメインストリートの役割を果たしてきました。また島根半島東端の美保関は、中世に海関が置かれてその名が生まれ、近世には北前船交易と松江城下町とを中継する役割を果たしました。一方で魚介類や藻類の絶好の漁場でもあり、沿岸地域の風土を語るうえでとても重要です。

中海と宍道湖は大橋川で一続きとなっており、東西に長い水域となっています。よって陸上交通の上では、その北側と南側では地域間の交通や流通に違いが認められます。よって、大きな区分としては両湖の北岸部と南岸部とで分けて考えます。

③中海北岸・東岸ゾーン

中海・宍道湖の北岸地域は、その東は日本海に突き出す岬の地形になっています。その先端近くには中世以降、日本海海域の広域水運の重要な拠点だった美保関があり、「歴まち計画」での「美保関エリア」を含みます。美保関からは境水道を通して、物や人が出入りし、中海の北岸や東岸には荷下ろしができる小さな港町や漁村ができていったと考えられます。そのような歴史的経緯も踏まえて、美保関から本庄地区、朝酌地区にかけての地域を中海北岸・東岸ゾーンとします。

東に突出する岬部分（おおむね美保関地区）と中海の西岸の本庄地区・朝酌地区の二つのゾーンに細分することができます。朝酌地区は大橋川に面する地域が広く、対岸の竹矢地区との関わりが濃い地域で、時に南岸の地域（後に述べる松江市南郊ベルトゾーン）と一体的に語る必要もある地域です。

④旧城下町北ゾーン

大橋川の西側（宍道湖寄り）の北岸部は、「歴まち計画」での「旧城下町エリア」の北部（いわゆる橋北地区）とほぼ重なります。このゾーンの調査・研究・活用は「歴まち計画」に沿って行いますが、それは松江城とその城下町の風致維持が中心ですので、歴史史料が数多く眠っていることが予測されます。「歴まち計画」と併行して、調査研究、活用を考えていくゾーンとなります。



堀尾期松江城下町絵図（北部）

⑤松江市街地北縁ゾーン

旧城下町地区の主に北側に、帯状に広がるのが持田・川津地区、法吉地区、生馬地区です。これらの地区は古代・中世の山口郷（中世は東・西長田郷、持田荘）、法吉郷、生馬郷とほぼ対応しており、さほど高くない丘陵により仕切られていて、陸上交通での行き来は歴史上、常に盛んであったことが推測されます。それぞれ古松江潟、^{ほうきのつつみ}法吉陂、^{さたのみずうみ}佐太水海といった内水面や湿地に面している地形条件もよく似ていて、東西に水上交通の拠点を持つゾーンです。近年までは水田が広がる農村景観が残されていましたが、都市化が次第に進んでおり、現在、川津地区は市内でも最大級の人口集積地区です。

ゾーンの東側は佐陀川や幹線道によって日本海側の^{えとも}恵曇や講武との交渉が盛んで、それは古代にまでさかのぼります。

⑥宍道湖北部ゾーン

佐陀川より西は、北山山系の峰々が東西にほぼ直線的に並び、しかも分水嶺が北の日本海側に偏っているため、裾野が比較的緩やかに南北に広がっています。その山裾を細長く幾筋もの谷が刻まれており、谷底平野が形作られて、現在その多くの部分が水田となっています。秋鹿郡の宍道湖側地域におおむね対応しており、古墳時代前半期（4～5世紀）には東側の古曾志や西側の大野地区に大型古墳が作られ、中世には大きな谷を中心に大野荘などの私領や秋鹿保など公領の中核地が形作られるなど、国府、府中、城下の近隣として、それらの経済的基盤を支えていた地域といえます。

3) 中海・宍道湖沿岸地域（南岸）

中海・宍道湖の南岸は、その中央部に比較的流域面積の広い意宇川などが流れているため、北岸に比べて南北に積層的に地域が連なる特徴を持ちます。その東西には宍道湖南岸の地域と中海南岸の地域が両腕のように付帯しています。

⑦宍道湖南岸ゾーン

宍道湖南岸の地域は湖北ゾーンに比べると、流域面積がやや広い川があるため、来待、玉造といった比較的広い谷底平野や三角州が見られます。古代より幹線道や鉄道（山陰道、国道9号、山陰本線）が東西を通り、南には中国山間地に通ずる主要道が幾筋か通っています（国道54号、県道玉湯吾妻山線など）。古代には山陰道から分岐して正南道（まみなみのみち）が南下し、宍道駅（ししじのうまや）が置かれるなど、古くからの交通路に沿っていました。

このゾーンは、おおむね旧宍道町・玉湯町の沿岸部に対応し、旧宍道町域と玉湯町域に細分できます。玉湯町域は宍道湖沿岸部に段丘地形が見られ、歴史的には東側の花仙山でとれるメノウを用いた日本でも有数の玉の生産地でした。また古代から現在に続く温泉地としての特色を備えた地域です。また宍道町の来待石は、加工しやすい石として古墳時代から現代まで、石材として利用されました。

なお、このゾーンには、「歴まち計画」での「宍道エリア」を含みます。

⑧旧城下町南ゾーン

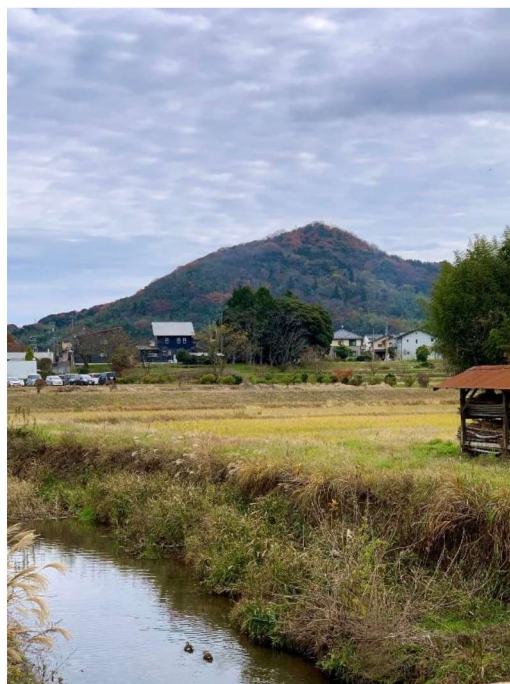
大橋川の西側の南岸地域は「歴まち計画」での「旧城下町エリア」の南部（いわゆる橋南地区）と重なる部分が中心となるゾーンです。堀尾期は南北に細長い範囲が城下町として開発されますが、その範囲は次第に広がりを見せ、鉄道敷設で松江駅ができると、水田地帯だった東側も都市の一部として発展し、現在は松江の中心地のひとつとなっています。一義的に「歴まち計画」に則って措置を行うとともに、新たな調査研究と活用の視点を重ねていくこととなります。



堀尾期松江城下町絵図（南部）

⑨松江市街地南郊ゾーン

旧城下町南ゾーンの南側には、西に乃木段丘と呼ばれる低平な台地が広がり、東には意宇川の堆積作用で作られた意宇平野が広がっています。乃木地区、大庭地区、竹矢地区と呼ばれているこの地域は、西は宍道湖に面し、東は中海に面しています。交通の要衝で、古くから安定した陸地だったこの地域には、弥生時代以降、中世に至るまで多くの遺跡が存在します。弥生時代前期（紀元前4世紀頃）には意宇平野の水田開発が始まり、乃木地区に西の入り口のモニュメントとして田和山遺跡が作られています。古墳時代前期後半（4世紀後半頃）以降は、東部出雲で最大の古墳が造り続けられ、7世紀後半頃には出雲国の国府が意宇平野の南に置かれました。中世には府中となり、有力な寺社も集中しています。「歴まち計画」では大庭地区と竹矢地区の一部が「国府跡周辺エリア」として設定されていますので、その施策の成果も反映させながら、新たな文化財の調査研究、活用を考えていくゾーンです。



茶臼山の山容

⑩中海南岸ゾーン

松江市街地南郊ゾーンの東側は、中海から崎田鼻が北に大きく突出しており、その東西に中世には意東荘、揖屋荘が置かれていました。中海沿いにはそれぞれ港町が形作られ、須田川、揖屋川と意東川の沖積による平野とともに、南には谷が奥深くまで入り、谷底平野を形成して水田が営まれていたと考えられます。現在、下流部は近代以来の農機工場をはじめとするものづくり産業の集積地となっており、また広大な干拓農業の地として知られます。出雲郷の阿太加夜神社はホーランエンヤの御神輿の到着地となっています。

旧東出雲町沿岸部の大きな部分を占めるゾーンです。

⑪大根島・江島ゾーン

中海には火山が湖上に頭を出した、大根島と江島があります。粘性が弱い溶岩が流出した起伏の緩やかな火山だったため、島は緩やかな台地状の地形です。少なくとも縄文時代以降、人が生活していたことが確認でき、江島には古墳も見られます。『出雲国風土記』には「牧あり」と記され、官営の牛馬牧場があったことが知られます。同じく



南上空から見た大根島と江島

「風土記」には土が豊かに肥えていることが記されており、現在、薬用人参や牡丹の産地として知られています。近年まで、島内の女性が近隣から沖縄以外の全国各地に花木類の行商に出かけているなど、独自の生業が発達していました。

4) 中国山地北麓地域

⑫中国山地北麓ゾーン

意宇川や忌部川は、比較的流域面積が広く、松江市街南郊ゾーンの南側山稜の奥にやや広い平地が広がっています。また意東川、玉湯川、宍道川、佐々布川、来待川などの小規模な河川が中小規模の谷を開析し、谷ごとに集落が展開しています。『出雲国風土記』には、意宇川の源流部の「熊野山」、野白川（忌部川）の上流部に「久多見山」と信仰の対象となった山が記されているほか、京羅木山、星上山、花仙山、八雲山、馬鞍山などが地域の背後の山塊を形成しています。古代の中心地の後背にあつて、それを支える生産の地、水源の地でもあったと考えられます。近代以降、忌部川上流は上水道の水源地として松江市を支えていました。

谷底平野では小規模ながらも水田が開かれ、畑作や果樹などの栽培が盛んに行われていました。山林が広がりますので木樵^{きこり}や炭焼き、鉱業なども生業、生産として展開しています。旧八雲村域、忌部



東出雲町畑地区の干し柿小屋

地区、東出雲町・玉湯町・宍道町の南部にほぼ相当し、今でも安来市広瀬町や雲南市大東町、加茂町に通じる幹線道路が通る地域でもあります。そうした背景から、ほかの地域にない交流圏も形成されているのも特徴です。

2. 8つの視点

松江市は各時代を通じて、政治や文化などの中心地としての歴史があり、その特色を物語る文化財が、周辺環境と共に良好に残されています。

それらを通じて、松江市の歴史文化を特徴づける8つの視点を提示します。

地域住民と共に、これら8つの松江市の歴史文化の特徴を再確認するとともに、市政全般において、松江市の歴史文化の特徴であるこの8つの視点を踏まえた施策を展開していくよう、強く働きかけていきます。そして、歴史文化を生かしたまちづくりの推進を通じて、歴史文化を後世に伝えつなげていき、松江市の文化財を生かしていくことで、豊かな松江市の実現を図ります。

なお、これら8つの視点には、「歴まち計画」に定める松江市の維持向上すべき歴史的風致が関連するため、同計画の推進もあわせて積極的に図っていきます。

視点1) 交通・交流の拠点 松江 ～水陸の結節点～

松江は先史時代から、その地勢を反映して、交通・交流の結節点として発展してきました。旧石器時代には、中国山地・瀬戸内地域と隠岐を結ぶ東西南北の結節として、多くの人が往来したことにはじまり、弥生時代には海を通じて島根半島周辺が北部九州を経由しながら新たな大陸からの文明や稲作の受け入れ地となりました。古墳時代以降は、内海を通じた水上交通を掌握した有力者が出雲地方の広域首長に成長し、遅くとも8世紀前半に出雲国府が置かれる基盤となりました。中世以降も変わらず、その地勢の中で政治経済の中心という立場を保ち続け、やがて江戸時代に堀尾吉晴が出雲と隠岐を治める好所として、松江城を築き、近世を通じて出雲国の中心としての機能を果たしてきました。近代以降も水運と陸上交通の結節としての機能は形を変えながら続き、島根県庁が置かれたことも相まって、日本海側の中核都市として重要な位置を占めました。鉄道開通後、次第にその性格は変わっていきますが、交通・交流の拠点としての歴史ではぐくまれた文化は、引き続き松江のまちを豊かに保ち続けています。

視点2) 城下町 松江 ～都市と周辺部が形作る有形・無形の歴史文化～

松江は、慶長12年(1607)から、同16年(1611)にかけて堀尾氏によってつくられた城下町の地割・景観が色濃く残るまちです。同時に近世にその起源をさかのぼる伝統行事などが今も息づいています。また城下町は、旧松江市街だけで成り立っていたわけではありません。周辺の農村、漁村、山村などが都市に必要な物資を供給し、支えていました。そのための交通路や情報の伝達方法も存在し、現在の松江市域全体で松江城下町が成り立っていたのです。さらに、各地に残る民俗芸能や習俗の多くは、江戸時代から引き継いでいるものが多く、その数の多さと多様さは注目すべきものです。

視点3) 水がはぐくんだ豊かな松江 ～海・湖水・堀・河川・池泉～

水環境に恵まれた松江は、いつの時代もその恩恵を受けてきました。豊かに残る松江城の内堀は今でも観光資源として活用され、宍道湖・中海の汽水域は、独特の生態系をはぐくみ、ヤマトシジミに代表される幸をもたらしました。また、日本海岸は、水産資源だけでなく、古代から交流の窓口として、大きな役割を果たしてきました。市街地では堀と川が風致を形成し、周辺部では池や泉と水路が農村景観の基幹となっています。広い意味でも、松江市は「水の都」と言えるでしょう。

視点4) 古代出雲文化発祥の地 松江 ～「意宇」^{おいう}と周辺が語る有形・無形の古代文化～

松江市南郊には、出雲地域の首長クラスを葬った古墳が累代的に築造され、後には、出雲国府、出雲国分守など、出雲地域の政治の中心地としての性格を確立します。「意宇」^{おいう}と呼ばれる中心地域の周辺にも、数多くの特徴的な古墳が存在し、意宇を支えた首長たちがいたことが知られます。また、『出雲国風土記』に記載されたり、出雲神話にみられるような古代出雲文化が息づく古社も数多く存在し、今なお人々の崇敬を集めています。茶臼山の南側を中心に古代的な景観も引き継がれており、意宇周辺地域は「八雲立つ風土記の丘」として島根県とともに保存・活用の重点地域として位置付けています。一方で、この風土記の丘以外にも、古代文化を感じる文化財は松江市内各所に残っています。史跡・名勝・有形文化財はもちろん、神楽などの無形民俗文化財も神話などの古代的伝承を基層に残しているのです。

視点5) ものづくりの伝統が息づく 松江 ～伝統の産業と伝承されるものづくり～

古代からの玉作り、藩政期からの伝統が息づく茶の湯関連工芸、近代以降は民藝運動にも深くかわるなど、ものづくりの伝統が息づくまちが松江です。また建築材として城下町建設・存続に深く関わる来待石^{きまち}や瓦づくりなどは伝統産業として城下町周辺地域の発展を支えました。そのような産業やものづくりは、失われたものもあれば存続するものあり、形を変えて生きているものあります。文化財類型としての無形文化財としてだけではなく、ものづくりを支え、記録に残していくことが求められています。

視点6) 茶どころ 松江 ～暮らしに根づく茶の湯の文化

松江松平家7代藩主^{はるきと}治郷^{ふまい}（号不昧）が広めたといわれる茶の湯の文化は、松江には今なお色濃く残り、茶室は国・県・市の指定文化財となって、伝統工芸、お茶と和菓子など関連文化は、松江市民の誇りです。また現在でも、松江市民の間では薄茶や煎茶を飲む風習が色濃く残っており、漬け物やお菓子などとともに楽しむお茶の時間が市民生活を豊かなものにしています。一方で江戸時代に奨励された茶の生産は、今でも朝酌地区や長江地区などで行われており、畑や宅地の区画にお茶の木が植わる風景も松江市民に原風景としてとどめられていることも多いと考えられます。和菓子どころとしての松江の背景として、広く行き渡ったお茶の文化が大きな特徴です。

視点7) 地質遺産の宝庫 松江 ～自然と人間が織りなす文化～

日本ジオパーク認定を受けた「島根半島・宍道湖中海ジオパーク」には、多くの地質遺産が所在しています。それらの中には、大根島の溶岩^{ようがん}隧道^{すいどう}、美保の北浦、潜戸^{くけど}など国指定の文化財も多くあります。地質遺産は、歴史の中で名勝地・景勝地として人々に愛でられ、あるいは信仰の対象になりました。入り組んだ島根半島の地形は天然の良港となり、様々な文化や物資を受け入れ、松江の経済や文化を支えました。自然が作り出した地勢は、地域性をはぐくみ、地域独自の文化を形成し伝承もしてきたのです。

視点8) 国際文化観光都市 松江 ～外に開き、交流する風土～

古代より日本海交流の窓口として、国内外との交流を行ってきたのが松江です。中世以降には美保関を窓口広く交易がおこなわれ、内海に港が形成されました。環日本海は国際交流の中心でした。近代には、小泉八雲が松江に住み、著作を通して、松江の文化・生活スタイルを海外に広く発

信しました。「神々の国の首都」として世界に知られた松江が、戦後には国際文化観光都市となって、多くの人々をいざないました。